

## 磐田膵がん早期発見プロジェクトの有用性に関する研究

【はじめに】膵癌は代表的な消化器難治癌のひとつであり、5年生存率が10%と予後不良の疾患であり、本邦ではその罹患率も増加している。一方で、最大径2cm以下の転移を伴わない症例では、5年生存率が50%以上とする報告もあり、現状では、膵癌をできるだけ小さい段階で診断することとが膵癌の予後を改善する現実的かつ効果のある方法と考えられる。【方法】我々は、2016年度末より磐田膵がん早期発見プロジェクトと称した活動を開始した。対外的には、地域の開業医への訪問による膵癌リスク因子とリスク症例への画像検査の啓発、積極的な当科紹介の依頼を広報、市民講座も開催した。院内においてもEUSおよびMRI検査枠の新設や増加、EUS-FNAや連続膵液細胞診のクリニカルパスの導入などに取り組んでいる。今回プロジェクト発足より2年経過したことから、2015年から2016年度と2017年から2018年度のそれぞれ2年間における膵癌症例の臨床的特徴の差を比較し、報告する。【結果】以下、結果は2015年から2016年度、2017年から2018年度の順に示す。胆膵EUS件数は平均45.5件/年から121件/年に増加。膵癌診断数は56.5症例/年から54症例/年と増加はみられなかったが、病期(Stage 0/ I/ II/ III/ IV/ 不明)は総数で、3/ 6/ 27/ 5/ 69/ 2症例から3/ 13/ 26/ 19/ 47/ 0症例とStage I, III症例が増加し、Stage IV症例が減少した。手術率は16.8%から27.8%と上昇し、1年生存率も2015年度と2017年度を比較すると、31.0%から42.3%と改善している。【考察・結語】単施設で短期間の検討ではあるが、地域の開業医への啓蒙と院内の胆膵領域の画像検査の充実を中心とした膵がん早期発見プロジェクトは磐田地域では効果的であったと考えている。膵癌の予後改善には、さらなる診断能の向上と啓発活動の継続が必要であり、他地域との連携も検討すべき課題と考える。